連載

市長室からこんにちは

vol.91

益田市長
山本 浩章

一昨年にアイルランドを訪問したとき、空港の案内表示や道路標識はアイルランド語と英語の二言語表記となっていました。憲法にも、第一公用語はアイルランド語（ケルト系のアイルランド民族固有の言語で、別名ゲール語）、第二公用語は英語と定められています。ただ、街角で人々が実際に話していた言語は、ほぼ英語のみでした。

アイルランドに英語が浸透していったのは、イギリスによる植民地支配が強化された17世紀以降とされます。さらに1840年代、アイルランドの人口を半減させたとされる「ジャガイモ飢饉」による大量の餓死と国外脱出が、英語への言語交替を決定的なものにしました。イギリスからの独立後約1世紀を経た今も、ほとんどのアイルランド人にとっての母語は英語となっており、アイルランド語は学校で学ぶだけの言語にすぎません。

確かに、英語はこの数百年間、イギリス、アメリカという世界の政治・軍事の最強国の言語であり、経済的にも有利な言語でした。自らはアイルランド語で育てられた世代が自分の子どもには英語を選ばせ、身に付けさせたのは、その将来を思う親心からだったに違いありません。

一方で、現在政府はアイルランド語をかけがえのない民族の誇りとして保持に全力を注いでいます。今でもアイルランド語を話す少数地区（ゲールタハトと呼ばれる）や家庭を手厚く優遇するほか、高校修了試験をアイルランド語の問題文で解いた場合は点数を1割増しとし、公務員採用においてもアイルランド語能力を必須としています。

アイルランドの例は、言葉が人々にとってどれほど貴重なものかを如実に物語っています。このことは、アイルランドを始め海外と交流する際に忘れてはならない教訓であり、さらに言えば、手話が言語であることを明確に規定した手話言語条例が聴覚障がいのある方々だけでなく、すべての市民に対して持つ意味も指し示しているといえます。

※参考文献　嶋田珠巳『英語という選択―アイルランドの今』2016年、岩波書店

益田市の文化財の紹介

第7回　木造釈迦如来坐像（医光寺）

【問い合わせ先】市文化財課　☎31-0623

名　称	木造釈迦如来坐像
読　み	もくぞうしゃかにょらいざぞう
指　定	益田市指定文化財
種　別	有形文化財（彫刻）
員　数	1軀
所在地	益田市染羽町4-29
所有者	宗教法人　医光寺
年　代	応安4（1371）年
像　高	70.7cm
指定年月日	平成31年4月1日

益田市指定文化財・有形文化財（彫刻）の木造釈迦如来坐像は、染羽町の臨済宗医光寺に安置されている仏像です。

本像は寄木造り(※1)で制作されています。像心束（制作時に本体を支えるための部位）を残すことや、独特の衣紋表現(※2)から、院派(※3)の影響を感じさせる一方、ややぎこちない作風から地方仏師（仏像制作者）作と考えられています。

本像は胎内銘(※4)が発見されたことにより、その歴史的価値がより高まりました。これによると、応安4（1371）年に法橋広成を大仏師（制作責任者）、益田兼見を大檀那（出資者）、祖峰士禅を大願主（発起人代表）、威山（または成山）長雄を住持（住職）として、崇観寺の本尊として制作されたことがわかります。

崇観寺は、現在の医光寺の西隣にあった臨済宗寺院で、貞治2（1363）年に斎藤長者の妻直山妙超大姉の発願により、龍門士源を開山（初代住職）として開かれたといいます。

益田兼見は創建間もない崇観寺を庇護下に入れ、さらに諸山（室町時代の禅宗寺院の格で五山・十刹に次ぐ）にするために奔走し、益田家として特に大切にすべき寺と位置づけました。

戦国時代に崇観寺はなんらかの理由で衰退し、医光寺がその後身寺院として繁栄しましたが、本像は両寺の関係を伝えるものとしても貴重です。

【参考文献】『祈りの仏像』島根県立石見美術館、2014年。

【註】

※1　いくつかの木材をはぎあわせて仏像を制作する方法。

※2　衣装類の皺やひだの表現。

※3　中世を通じて京都を拠点に仏像制作に活躍した仏師の一派。代々「院」の字を名前に用いた。

※4　像の胎内（体内）に記された文字。

（島根県立石見美術館提供）